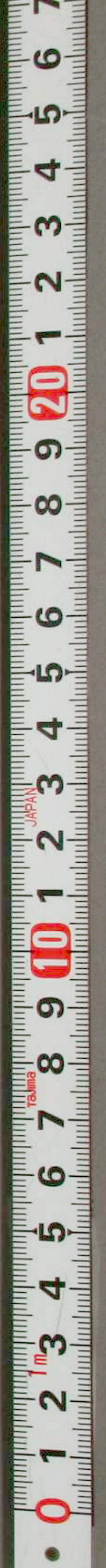
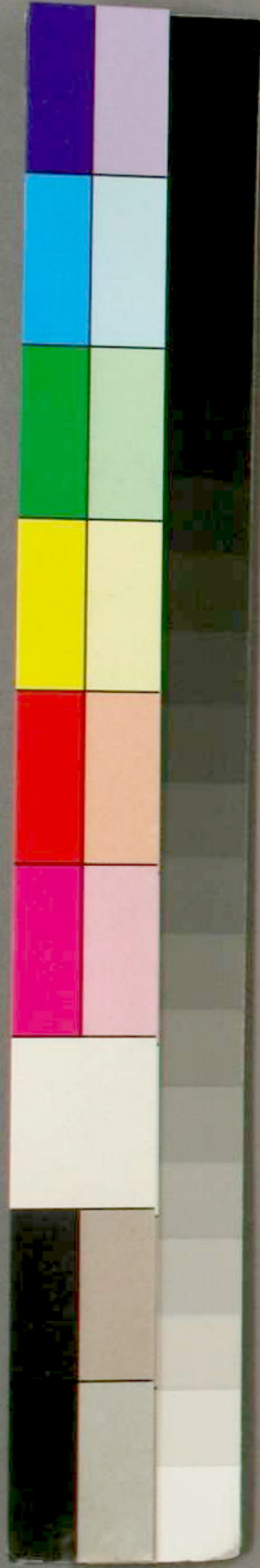


繪本拾遺信長記
後篇卷九十

逸 13
2654
6-62



繪本拾遺信長記後篇卷之九

目録

長秀の美路を小森幸

小羽長秀遇て勢揃

踏巻の森幸と筑城

踏巻森合戦之事

小田勢踏巻の森と押寄

踏巻乃森合戦給小孫六勇力

繪本拾遺信長記後篇卷之九

駿河守手解圍攻之書

小田方不吉の兆

上人御書親之御臨乞

小田勢強勃

孫六踊り

上人遠慮之書

先秀が俊祐守御守之御

繪本拾遺信長記後篇卷之九

長秀の妻駿河守手解圍

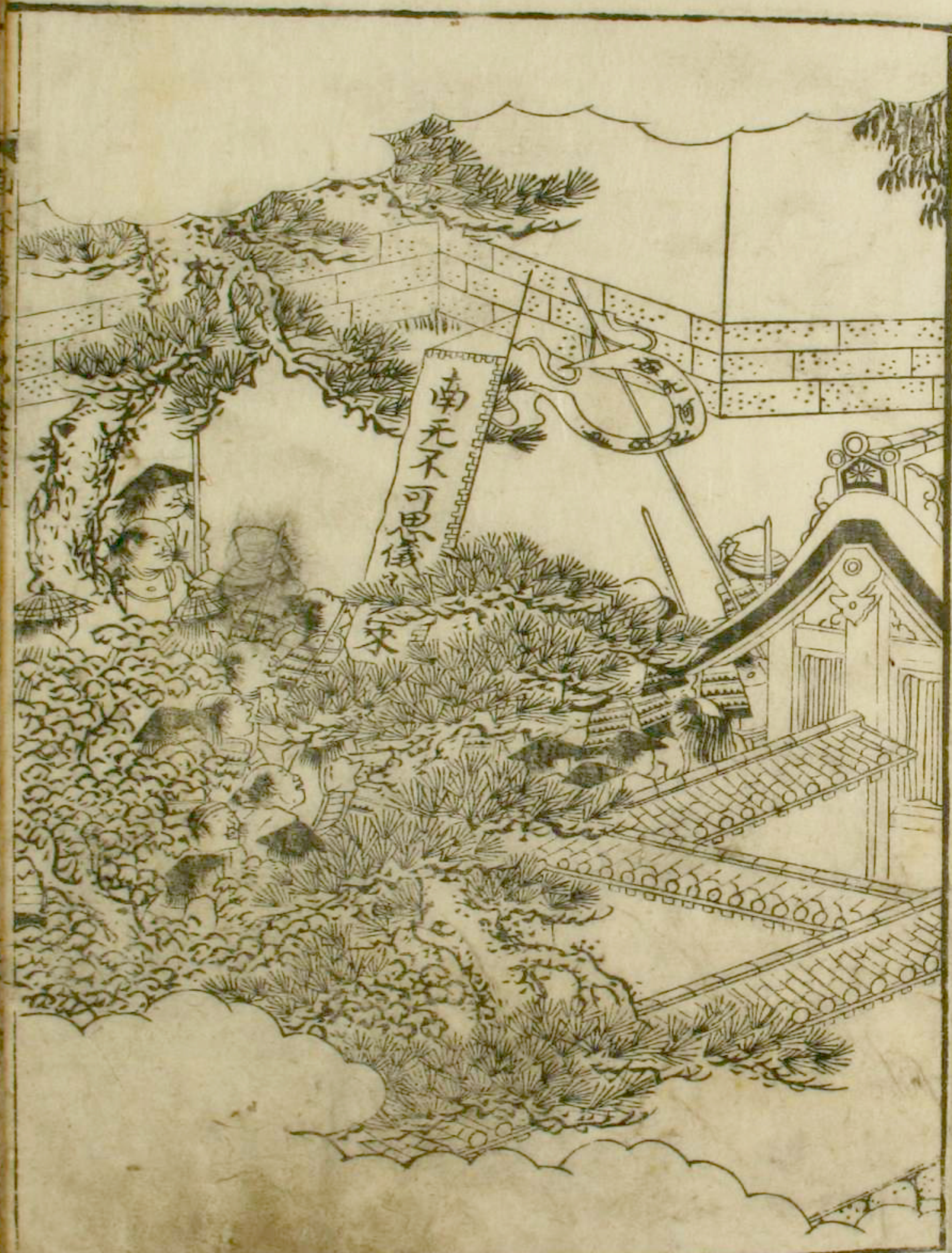
白紙大書

去る小堀表より宿陣せしに國邊海乃軍お舟取し即ち浦門
尉長秀の天正十年六月朔日俄又勢振をばし軍と押出たの
情しむるに近郷近立の門後多不審のゆゑ思ひに國邊海
の軍兵多此不しと勢振成るに若や駿河の森へ押上り上と
討きしんこの謀ははみりやとあやしむるに近郷近立の門後
けあは浸進しこれより門を破り上人が老翁の紙集め叔の明智
がや紙の勢多き情しむるに若や駿河の森へ押上り上と
差のゆゑ不審せんとし乗る難きの鈴木源市志摩に即ち
とめし近郷の門後をばしせらる此書とせし書き鈴木



志摩の云よと及びは安徳の門後我もしくと馳あつたり
百余人を本教寺と雲々あり聖化が六月二日丹羽又郎左衛門
長秀の三子余人塚を立て紀伊國に押し合戦の森より十丁井
水の方より陣をえく威風とあはし其勢を二手よりうら
ちのたぬ丹羽又郎左衛門溝口伯耆守喜山修徳守戸田武
義守坂井と右衛門等一又又百人又一ひり長秀が腹心の良
等江口三郎左衛門堀江左衛門村上周防守尾後喜兵衛等一又
又百人左右より同附の妻討人と其用多分なせば本教寺の
も家老下間乃一族とそとめ坊主衆は塚の美宗寺河内
の専光寺松州小湊の専光寺日圓三番の定光坊本専寺武
士は雜賀の鈴本一統孫市冬人志摩又郎宗門の渡院は

時なりと老る若人のきらひなく道在道村の門後百姓も我
もしくと馳集り一命とらげうら防ぎ交んしくは突や百の
の羽絶た今日又格りぬまは信長を眼と上人を悼と歎き悲
まんとあつめはし上人も今のこれとて抑し召されし御堂
所若若其外の洲一族も各洲生家あぶると乃洲光悟して門後
の士衆と下知し終ふぞありれども、たはしるまゝ次子之備り
丹羽が軍勢三子余人潮のうらく押奉り御堂のめぐりを十
井をよまかゝる間をど門とらげたりしに今や本教寺の
うらあゝんと兼て是悟の門後の道信結一日又教をとるら
る門と一度又後うら叫喚地獄のありさましかくやとむら
はしる下間教藤教をよげはし懸したるや責よ祖師聖人



の洪暴を思つて命うきり以法敵を防ぎ叶らぬ隙に折死せ
 又其府こそ日暮急じなる西方弥陀佛光明を殺らていつた
 まし利根を授けし此佛敵小田信長を極楽浄土より責難ん
 何の子細うあらんきぞやいさやとちと下知とれが難攻の門
 後珍本の一統すくこそ喻し孫ふりのうる未達の先陣仕
 とお口をかうち弓鉄炮をいしくと押さる人得りの引さげ待居
 うらけなげよこそ日之又夕し附よお洞が先口は軍勢
 らうくと押させ鉄炮を打ちけ火舌を放ら皆附よ急落せん
 とのこまの門内より此石破らさうばとや上人の計生害
 あるべ防げやせげと怒くよ呼り門と並ぶる鉄炮の目
 されを採せんぐよ折出せと月よはまる敵の大勢強の門後力

はくは防ぎ難くをん人うらう

隆の森合戦の事

寺内の軍兵ふせたりて人々しが珍本孫市月老人日孫六斯
 ていそじと務くを勢引急じと無門を推りき稀麻のどく
 らまきさる敵の中へと門と喚ひく突て以摩利支天の荒さる
 あさまは後尾石新立突立今日とわさうの死うらひと雪の浪
 をあげて戦ひく冷し勇勢方り寄子の軍兵を敵
 と侮り石山は似さう要害深ましと寺内は百姓の門後か
 集りたまはとく何のりを仕おれべき只一りよ美崩さん
 思ひの外珍本一統が極勇信心堅固の働き死と怒さう鋒先
 切まらま子物い死人頗ましく思らば軍勢突死され一町をうり



小田原の森



小田原の森
あそび
あそび

圖本信長記後卷五

六

うろろ後陣の考ふこれを見くもやど乃小勢又実崩さけ
中うやあつんがしきあつまいら引さ者どもとらうれと
せまども引さる軍勢の解るれいよく強をまてえたる小
ぞ鈴木孫六得たりしこゝあまはましとちかま向よじくば
あつん瓜幸切ふせ難うせ紐白門と戦ひつうは舞子の中より
誰ともあつん打おれ鉄炮孫六が右の脚よりつり居居にぞう
と倒ししうは款兵これを討んとぞうくとま考ふを孫六斤
足まてちかふりまはし近付款と防ぎこれと既え老く足え
うろろつり鈴木孫六市をろろ小つくと見くこれバ宙と飛んで
近寄りえうこつと款兵と口方へむ門と退散し後又孫六を
救ひ出し肩よりけて退きたる寄りの軍兵これと見く退討

せよとのつちろろ瓜大おみ羽長考これを制し日も西山う
つらけが夜軍せんも喰さきやかり明朝一日は押寄一息よ
系えんと軍勢をまどら本陣へ引さる本陣守よあ門よりし
門後乃めんく今日討死の付たりと兼く是略てあり
これと款退しとつとんきやうをう今宵も波濤は逼る
あうとつちあにあつり明日こそ心よく討死しつての所や
そくに遠ひう核樂津去は競くはし各あつこすい限り
とつちあに合し守り居る小旗はさるは考ふの陣と見せ
うろ小信者軍勢とせ加しととんく炬火無火の考ふ天
あつちぬきつろくの旗は物旗も吹らびき寺の口より
款兵をうぬ張りろくおびけしとも云らん方はし門後を



通不詰天口



踏乃森
合戦
珍本
六
勇力

通本信長記卷九

見てあなけしうの軍兵や明日の此軍勢をみて一日は美奈
 うはせ射しとせだれ支へんや美奈はいとや軍のたじまらぬと
 き小室期の志佛あるると寺中一日は稱名の勢を唱はば
 於如上人も沖連技家老等成悉くは集めらるる祖師の美
 教を本堂の西に居させ給ひ沖派せられたるを給ひは末世
 濁乱の附節是悲はとはつども祖師聖人たましくは宗
 門を弘通はしつてより教百年の今も有り紀意と世宗門
 後信心堅固と美なれどもとて今日此妨難あり宗門忽
 ち滅ぶ及ぶの嘆中またりと誓し給ひらん美奈我不
 徳のつらに不之と美教は向くともぐとめきとれた給ひしう
 一庵の人これを見給ひあな悪の信長やう教あるき若知

徹を此際まぐ若くも美奈とらるるの勿得やと面慮なく
 後にはしむやみそ上人堂の中へ明日のどくより教軍美
 奈は強て逃ぎ戦ふとらるる死期は終んで飛降りて何う
 せん美奈門内は逃入るが皆我とらるるも生害とんきる本
 堂は火をうけ焼とらるる「芥子」門後と皆同終つてこれあ
 ちはうらびひと門運は生れ得るは行つて人き折云のてあ
 とし沖うまうけをせし門後の庵中へ場やらんが美奈は今世
 の沖勝を難く頂戴せよと西へ沖流を成いたきとるが胸にま
 つてこそ久得だ一日はもうと後なる間の教よりとてははし
 つまかりたる次方なり

隆吉の正林壽子解圍後支之書



西本信長記後卷九

十

明は六月三日まゝ志のゆのあけをりしる小寺の太軍
日よをりし其勢ひの始り大山を法んぞら滄海に渡らるる
さす少く日暮小岡をこりてあけつるの今や本教寺の圃只一掃
又美崩さんどろをなかり門後のせんくといや今こそ我くぞ
往生の附するぞ此後死せんより一働き戦ふとそれと去る
討死せよと叫りく得物引上げ斥咄と吾で扱へり丹羽が
軍兵何の舎敷より及びた後兵急よ系入とやと懸る長柄を
引なげく峰際へひらくといけより亦に中敷の敷
て岡を仰り見ると一ひらきあまの陣よとありいゝ其雲中
南無妙法蓮華經の七字が書くる信長が大旗ひらめけて
かへへがす候くよまきて丹羽が馬の若に落たりあは

これを見んと歎も味方にも多分多あり石思儀やいゝる
腰裏の仕業もやと互方にも勇気たゆむ皆討の時と候
たり此府殿如上人の御次男阿茶丸若瓜御膳元と付らせ給ひ
御連枝二石に御生書あらせらんと既よ念佛も候せあり
門後のいゝや見ゆり給ふといふしうり多し寄りの軍勢
兼よかこをまたりて後陣より引退くありさまは
上人をとりぬ多し門後の危中なる心得の歎の結構なる
これかきまぐ美法所し必勝の合戦よろしくおぼして引ぬ
こそよししこれ見味方の人々を扱ひき出さん御うやと
亦にありて見たる中よ忽ち熱軍を崩して懸るをさ
戦を倒し右衛門左衛門と名はれ給ふるびき給のどくも門て上方に



上人
御教
御賜

日本信長記後巻九

て級をとりて不恩議と入り申さるるり寺中へ誘はしん
 何れよの強勅しつゝやとえく論じあひさめくの
 ありさるるに近郷の門後の男女こけり勝び川をせまうきの
 二日朝法教信長京都本能寺に旗をせしむる下明智の守忠
 秀保教を起し不恩に押しよ信長を討えついで二条の城を
 曲と息男熾之次信忠を妻殺し洛中洛外脱したれ及ひは
 今孝子の陣中へ此ののぼりあきてこそ無たさよめて引えは
 と若さうさる小上人をさうり御連枝家老門後の人こそれに幾
 うあてりあうさるうや追討して討留す血気の若者逸見
 て追うまはるるの門後の百餘名を捕へくさへく竹槍持
 鎌式に御敵うんごんを捕へく引ひ敵瓜んぐよ実まは信長

か殺死し強うたを多しの堀を消しつゝ小田の諸軍勢を遣う一人
 ありせし我れんとつ若者かく去民を竹槍に命を多かり或
 討り若れあり七郎に陣と八載に難例され候をもんて
 外を長秀下知し静人と制とれと身より又よ突入しに孫
 藤で立ちさる小長秀と詮方かくとも私とて這く堀の陣へ
 引えさるの足踏しつゝありさるありさるなり云々小本教寺の浄堂
 うは思ひ後けさる若者の退教とらひ孫は信長明智とら
 先りしとばへくやふ滋と藤垂の原本よあひ優曇華の花
 咲心地してえは法教の根の影うり當宗門に押ひく又は別宗
 なくは後氣備は孫院の利根の先秀がふん儒く佛教と孫
 信長若者なりぞやあううしやあううやとまのふの表とて

日本信長評傳卷九



小田の勢
發勃

日本書紀後卷九

十四

て勢い勇心致す間をきり扱ひけし終本孫正の人の合戦
 流丸は片足を打ぬと歩ゆるがどりしが信長討てあつた
 軍崩さして討てしとてよりあつたのうに」と頼家の苦悩も
 折志は獲着るが本堂へ片足ありと頼家一人の沖を
 出て日の丸を画し軍崩をさしと用きあつてやうな法
 のをいきて京門いよく末廣のりの沖野島と推して浪
 つ足をもどり舞うる小沖連枝家老門後の男女いやくと
 流るる勢いでよりなるためし方りし今又隣の森沖堂
 扱ひく懸踏躰と居し紙の具足を居しらんむの苦悩して躍り
 此右側よりとやまた明智が深敵今より通よりせし上人沖
 笑み沖生寄つてせし祖師聖人の沖を教へ一時の煙を焼

是の一向宗門の勢にむぶるたは其種をあやまらば長下の
 命と為しるも孫院消世の悲願よりなるは後うを
 仰がざらん何人うこれをまゐらざらんはしく信長云の沖あり
 さまを考ふる小勇極膽畧あつた獨歩「浪居の家はせして僅
 二教条の向は日本中園を切まて天下の武おと孫せし三
 後の右大臣は昇進しに海の権柄を崇手は極り終ふの流るる
 曾のの優傑もれどもまた就く執願まて後の好るは流るる
 ろのまひかりは霊場を焼傍に殺し本教寺とせまりて佛
 の上人を害し京門を衝滅せしと討てあつたのうに此節
 天下を襲ふの雲山を甲山をも美崩さんと軍馬とにむけ
 諸天の好るはるも明智先秀が裁送は命と為し終るは



つゞき信長云の自業自徳獲惠の報く事ありて云まらるる
因果の爲に不之且今朝陽の森よるの陣よるは云云
南委如法蓮華經の旗を引きたる爲に先よ是に合
戦よ候是出く信長云の御旗成事ひつづくとも云
を今長秀が陣中へ落して信長云の變死を告げ諸佛諸天
の要も後人のともいひ是れ非好魔も信長の悪運を憐れり
る青條のりるるやと子の毛もよぶらて悲し

上人遠慮之事

六月に日明智日向守光秀警の森の御堂へ僧若と送
て中階にあり信長悪運日こよ増長に本報寺を山と
妻云さんと其某と云に流すとも用ひざるのともいひ却つて

我を教さんと云先秀の姑小田家にて流するといふも其の
自後よりいひ信長の期波家の陪長我の徳和の流すとも
云波の後孫足利家の家人なり我天下と再貞さんと欲
く云方義昭云を信長よと云めとも云計て足利を死さん
と云云うる小信長云方を廢し自ら天下の政事と總持の
我謀門の渠が奸計に臨り一度に臨順と云ともいひ
足利家へ忠誠と盡し信長を討て西國よ押しまた義昭
云を京都よ向人再び云方と仰ぎなると云希に上人諸
國の門下へめぐり文を伴し門後の輩を討て先秀が中
階にあり流すとも云方への忠義行するも是も賜らんとも
今度本報寺の危き事宗門漸絶せんと云る事宗



光秀が
後者
本願寺
別

若のこは「火より其」を先秀が信長を討つ後
て今中教寺の安住より春日山の上人此石所感
ばしやふ飲常ありて又畿内及び道は淨勢の門下
ありし知成中「然し先秀よ力を添へ小回の積出を以
いよく法款の根を断絶せんこそ万令の計を成す
能中中國毛利家に入寇」義服をよ上洛すべし
家再真の助力ありて遠背のあはれは「かく先秀
あまはれ」先秀よ力を合せ給ふありしは本教寺に若の
よく加賀城を築き淨勢道に寄附し松州石山の中寺
再建せしめしん」宗門繁昌の計は「何れも助勢の者偏
又教を承ふ」と言成巧しめてや送りたる小上人は「石を

御評をみよし竹とて言成松今度宗門破滅し上人御
既又御は害あはれ先秀が力より佛款信長とて
尚安穩ありしを奪ふに先秀の忠告に於て宗門
再真の大権威とやべきは此度の教を以て飲常あり
まうんぎうとやたる上人改をうせ給ひ先秀が信長と討
い尚寺の急難を救ふははらひ已が眼とらんとて若
と仰し信長を殺しおとすは「て尚寺よ懸念くけりや
衆とてくを理よあはれに先秀の忠告に小信長と
うりとも先秀よおひし織造の輩のうりもあはれは
困りより小田家徳代の臣下馳参て先秀をよけり
あはれ」我信のあはれして遂に二味」門徒の中知し悪と助けしと

去りて京右の飛騨多祖への不孝此上のみべきや此僧假りの時
 こそ即光秀の使者(善治)の中城より来て此度就
 ち又及び門後統云の御叔ひより助命つて糸濱足尾
 といひ依て諸國の門後(下知)の義子(遠藤)志(氏)に
 防戦(門後)を遣(愛)の輩(お)さう(氏)に(一)意(板)人を(在)て(実)情(を)
 相(あ)い(ま)え(て)而(つ)て後(の)御(下)知(ま)は(し)ひ(中)や(後)に(是)る(將)留(り)に(務)法(に)
 る(と)と(返)信(て)使(者)を(う)さ(せ)給(ひ)ら(る)上(人)の(智)意(凡)人(の)及
 ぶ(不)に(お)く(次)と(後)よ(ぞ)人(々)感(ド)ら(る)

繪本拾遺信長記後篇卷之九終



繪本拾遺信長記後篇卷之十

目録

羽柴統元守國守教守本

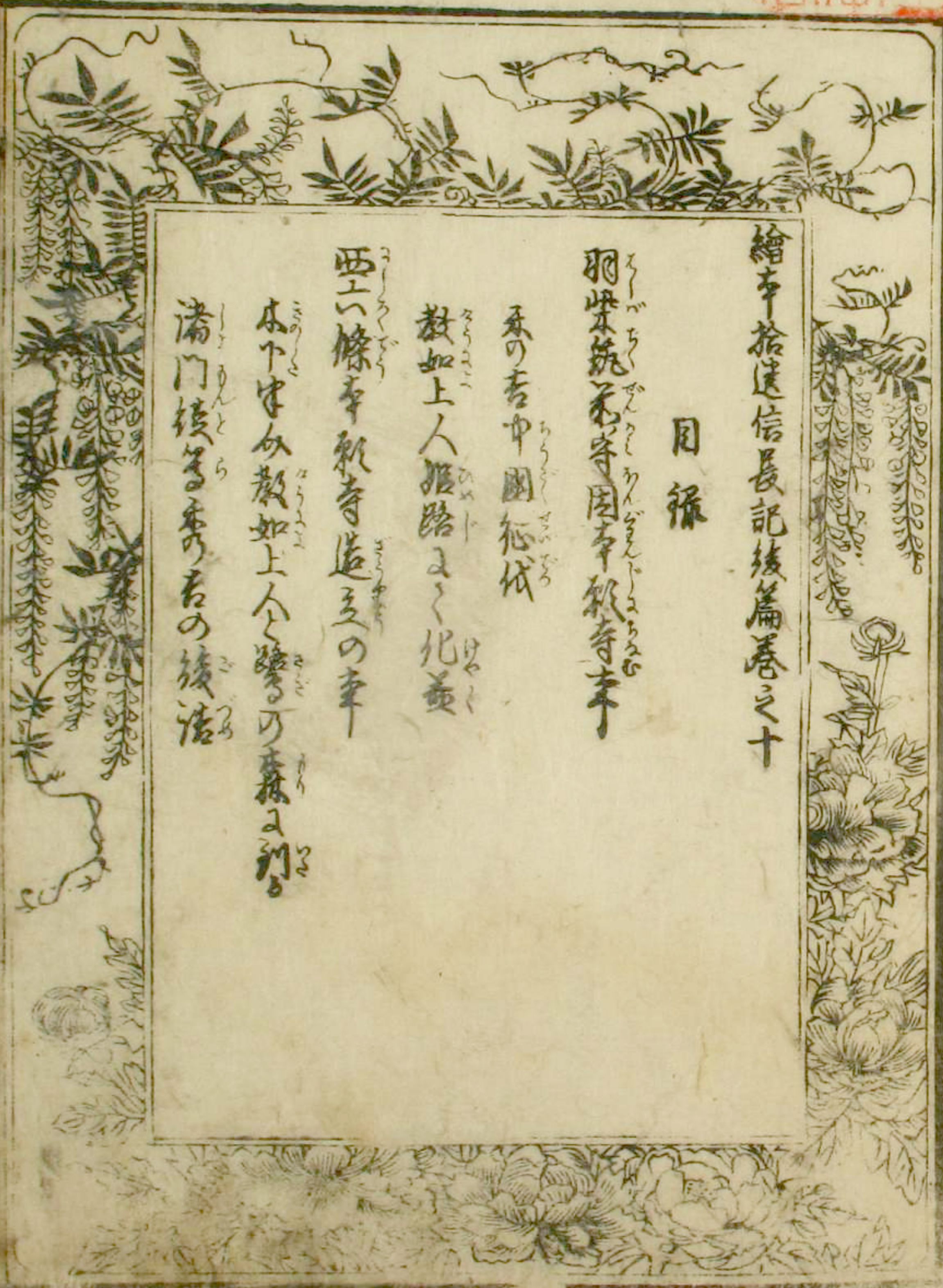
承の吉中圓征伐

教如上人雅路より化美

西一條守教守道三の幸

本下守教如上人と時乃森より

満門後守教守君の後法



秀吉の修二光秀の修二信長

東六條寺親守造立之幸

上人又子佛照寺之河入

馬河見まひ

本曾の依山より巨材を伐出

戸原山の強士懐力

東六條本山造立之幸を運ぶ

繪本拾遺信長記後篇卷之十

羽柴統元守國守親守

白笑高治

此對信長云の家臣羽柴統元守秀吉の中國征伐の大おきて
 彼中なる松の城を水攻はし毛利吉川小早川の三家を討陣
 信長云の加勢を討つる小六月二日京都本能寺を抄ひし
 信長光秀が乃小賊せらと終ふは三日の夜はゆきこれ
 秀吉を討つるき秋くつ大方なり信光秀を討て七君の吊ひは信
 人且のいと重し毛利家と和睦を成し中國の陣と構ふる幸
 國姫治の城まじく登りし是るが此おろし本親守の朝門敷如
 上人の石山用齋乃後密に紀州隆慶の森へ入らせ給ひぬきとも
 表向又上人御勘當の御あはれ信長云の安と候り隆慶の森



日本傳長江言俗卷十

をいひせ給ひ横州に押し「なるは秀吉のいそり小かづりいそ
らせ良徳も本下才御を」瀧邊の正徳へ譲らせ給ふが御寄
い慈教信長が御信羽田本條奉寄より教如上人を「一
さるいさゆり智謀の秀の吉河操ゆた子細をもんを教如上人い
そは家老下回法橋を以て其親孝い瓜易させ給ふは秀吉の御
謹で中々るい五人秀吉今度七若信長云の吊ひ軍の御中
國より馳のがう和國よむるを新門法教如上人娘信の地
親化はし給ふをあられいし見たり秀吉石川よりいへも御勤
の御嘆ひやさんてめ家老才御を」瀧邊又子見秀の儀は少
いなり即秀吉が書簡御被為教を存るべく封せし書状一
通とせし如は中回やかく如如上人へかくて中と秀吉の書簡と

持て上人封と一切て見給ふ新門御勤のいひの御勤
秀のよより人々御流やぶきの回免作はし給ひるべく就ていそ
教寺宗門惣昌せしむの親孝とまやう小新門の中後と
ぬまは是又使させ給ひしその文表たり教如上人はくく御
流ありて後者の口と書簡の文御勤當の嘆ひのこをのべて用
い新門かぬよりいひとあるい慈教と論せし又子對面はし「いそ
の事なるべし」と押し「しんがやうて教如上人とむて秀吉
が中合はし次牙を見ゆし給ふ此御教如上人中させ給ふは
度なる良殿不意の御よりい秀吉が逆册天珠のがまらうい
んを信長と押ひく我宗門の法教よりいそとむて秀吉の
よむる秀吉よりい秀吉人なるいそとむて秀吉の悪しき

徳川家康書状

田



画本信長諸侯卷下

思ふに先秀の信長を討を以て上人を救きとらし門後の助
を乞ひ秀吉が吊ひ合戦を賭ぐんと計るべし上人謀りて
秀吉の行賄し給らば君臣殺す運匠は返し出家の事切
遠い竹の天誅のふと給ひし秀吉の心じゆ小田の御大い
く本願寺と懇款ありといふり海東門は概とほし後
賊は押さふがたう上人悪くそむき義は順ひ秀吉が吊ひ合戦
の合体し一臂の力を助け運匠明智と亡し給ふる小田家
の氏族古光の臣中皆上人の心算と感心してとづくし
信仰の門後とてらるべし且運匠誅伐はし給り天下
新造の後い秀吉の運守乃大擲然と給り運匠又押して本堂再建と
さし給ひてこの事掛紙を以て中會ありとていと委細つまじ
く小田の事

ま也くば上人かきりたり悦ばし秀吉の兵見
叶つり既光秀俊若を以て我をいさるる人も我は
運城は一味とてんや秀吉が吊ひ合戦をいさるる我門後
ていそく小光と助くばしと仰らば本下は助をも
く御食應ありとて委細の事を中會あらば返書と
姫路の燃へ歸し給ふ

西二條本願寺造立之事

羽柴秀吉の明智が計策の裏とて九教如上人の
たらし本願寺一周の参り門勘弁のありしを
やうり於此上人心中と沸くまらば給ひ密に
後へ廻文を以て秀吉が軍と助け給ふ事
又押して



本下中女
教如上人
警の森
訓る

画本竹長言候卷

又軍威をばし大軍を降し日月十三日山崎國山崎に出陣し
光秀と對陣し光秀天刑の趣をさす小よりてや坂本の
松とらるるが國丹波は退き歩く軍威を張天下の憂と見合
せうは滅亡の期とせそく陣よりて一國の憂ともあべき
又山崎へ出陣して秀吉が義軍と鋒先は交へ我は「我は」
いそぐ是は敵討とんき只一戦は勝利とせし惣軍とあ
多事調練の強弱勇平悉く討死し其勇は小栗極建と
つるをばし去民の命とあし又敵の後より殺逆の要名を
あしつるぞ滅しつるし次方なり羽柴龍舟守秀吉の
君の怨敵を只一戦は討死し中以上略して事つる細と奏同し
つる小栗極建より秀吉が勇功極建なりと感づさせしは

此上京都及び近國と静ら敵意は抑ぐるなりしにむづしとに
後のおおは任し終る是より秀吉の威勢唯朝日の比のち
よる是より日向の如く敵とる者も終る者も衆人皆入るの
そび山崎征し東國を降し西海と中南海と隔り戦功の
速方より後九多しして天下は統秀吉の心裏に入性
を居し獨り國向敵は罪進し應仁以来百有餘年の仇世此
は忽平定し臣の海志はつるしとすはつるしはひひひひ
御代承威と祝しつるらあでたつるらあはし方なり是
中教寺殿如上人の秀吉の威勢さうん方なりして今も
懸尊の心づつひははしつるらあでたつるらあはし方なり
トはが方よりつるせはひはしつるらあでたつるらあはし方なり



清门校
秀吉云
後清

日本信長記後卷十

勅化意之也然於天正十三年同八月西上人將州天濱の藤川
勝とて之を更移候へり此節勝君云此州根葉新の
根葉新は日國の國人を以て征せんが爲に南國へ軍馬を以てむけ
給ひたる小貝塚の軍兵往來の甚るれば不意の狼藉も有りん
なり勝君云の命より川と天濱川跨よりり給ひ置し即堂と
建匠しと勅奉此而に候せ給へ即今の佛照寺これ之勝君云
天下平定ありてさきの物承は移し京都西の桑畑川に於て
本教寺と御建立ありて殿如上人御父子とむる人給ふ附は天正十
九年八月之歲に御開山聖人の法徳つらまらるるつりし人京東山
大谷の本教寺焼亡してこのころ馬馬の中と名の死百戦の内と
まぬが二百二十有七年の今より再び京都に御本寺造立

ありて御宗門まじりてさき之入慶よりたることを難き御法よりき其
聖年の文縁元奉たり此年の十二月廿日殿如上人御奉又十
歳にて遷化し給ふ此附に岡勝君云朝鮮征伐の御指揮せらる
給しとて此國名漢を漢と改陣して御置したる小教如上人
より御父上人遷化の縁を御脚を以て言上し給ひ置れ給ふ
ら給自御相續の御宗印を以て下さる其文又曰く
門跡不意之候要是御次身給言語以御中其方御願
之候以るを相續法度以下世中付勅給要是御願
相立是御願要は尤者本門跡本房に彼相續其方
屋敷に御光院後小御坊御副一處在之而可給以貞
門跡御光院引廻母候に若給を以尚御御心給業



秀吉
山崎
光秀と
御殿

院本下字助可中ハ恐

極月十二日秀吉云御朱印

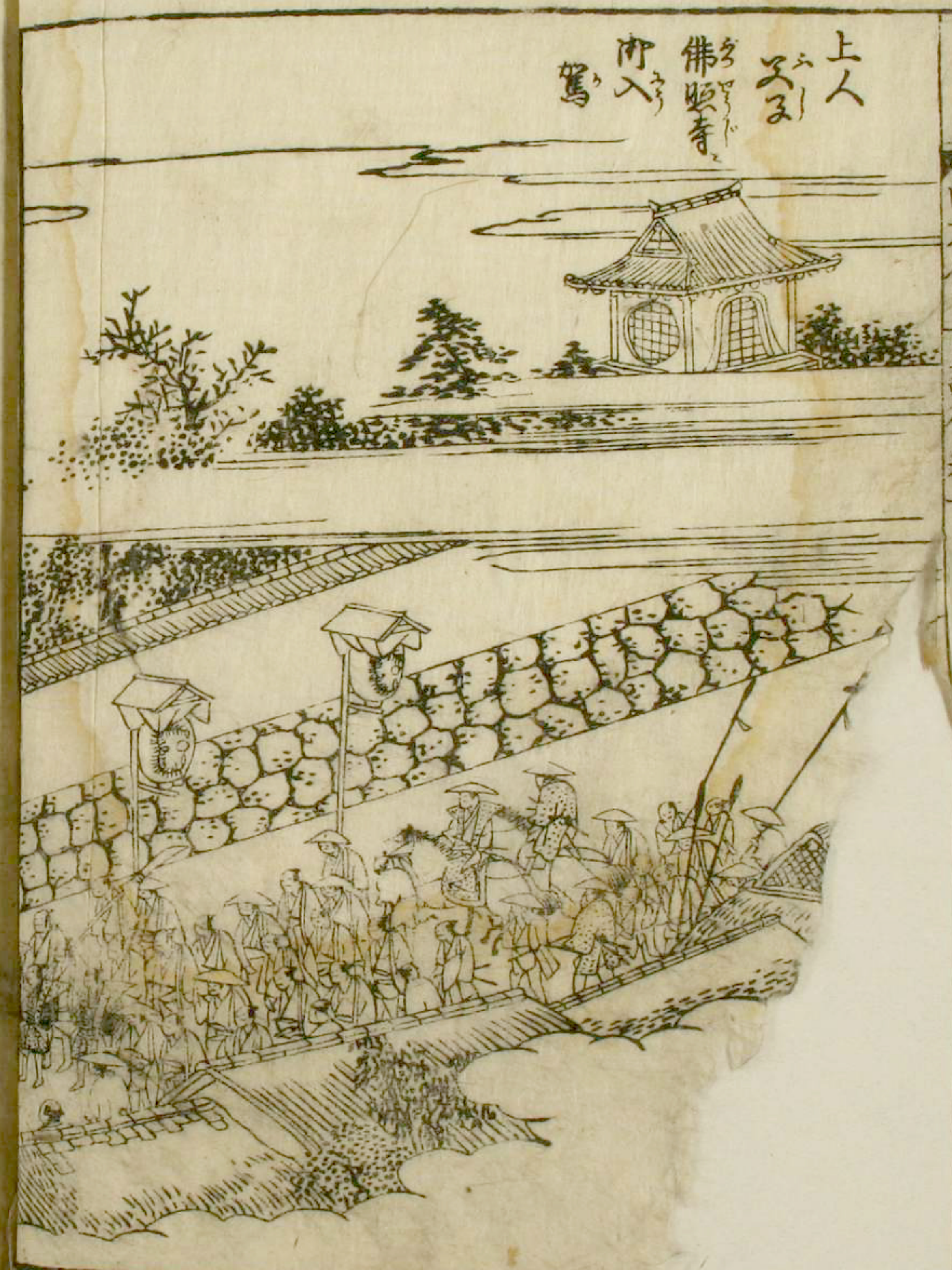
本教寺門跡

又教如上人の御母云へ下されし御文云く

門跡をんうのうせひるき次升中ハ中うもく
去るうよき子達御よりハ採報者てハ新門
跡をうりやうのうてはまき跡とつご家のうけ
中うもかくごんれ本坊へうり今まそのおとく
新門主の云えまう院をうりそうごもね帰り
これありてまうぶくいなと局にこまハあるうこ
十二月十二日ひでう御朱印

山のうへ

かくのぞくはし下されしをよぞ教如上人ありがく頂戴あり
本坊よりうり終る本教寺の別当職はゆり終る此付まをり
如上人御堂の山の御籠は母をせしが此度本坊へうり
まふより御母云と御令升理光院阿茶丸殿を上人の恒
終り水の御籠へうりせらる我ら小理光院殿付の家光門
後の中より教如上人法燈相承し本寺相續のり理光遠
理光院殿こそ本坊相續あふき御母のうり御母云へま
内談及びびれが内議論まらくして一定せは先
本教寺石山退去の是に教如上人は月九日又御退去
新門教如上人は七月まを御籠城はるを門後の内より其



上人
六子
佛顯寺
御入
駕

畫本
信長
記後
卷十

奥言成知る者多く又乃冲心は遠く筑城の事へり方と
 評し多名に取如上人の意て教如上人と計を定む是後人
 子にいかゞ小勤當つてはは禁廷中終ると云御方より教如を
 勤當のふ本教寺別當職を嗣若し准方とぞと思ひもせ終る
 取如上人理光院阿茶丸こそ法燈のつとむと善へ終ひ冲
 書せ終る取如上人沖子其人はくくろ嫡男の即教如上人次
 二人女もて抄にに男の阿古丸殿とく是真心寺の門然なり理
 光院阿茶丸殿の又男とて世傳冲年又歳は始りせ終るは後
 又教如上人冲勤當冲先の上嫡男とて新門跡と云せ終ひ冲家
 智相續多んり勿論方り尤も小先は取如上人の書せられたり
 凄情を以て理光院殿こそ跡目と座し終るを先上人の思ふと

中幕且冲母云教光院如春尼云母は沖一腹の沖子にはしまたも
 いろろのりや教如上人を悟ませ終ひてより阿茶丸殿と相
 續させると抄にしる小此度と圖の冲朱印に至り上いせひ
 く冲子知に終ひ終ひぬ

東三條本教寺造立之事

其翌年文禄二年の秋とや左衛門秀右云一先冲佛居の冲
 ありしは津國の馬の瀬の水は活く終ひ教目彼地は冲佛居
 されば本教寺の母寺如春尼云奉の時方りとくを圖冲入湯の冲
 籍にしようろぐり馬を被き終ひされば左衛門様通うりしを
 近く振うせ終ひ冲常ると終り着尾跡によりしを小尼云
 源をたらくと流し終ひ思ふく教如の先を取如が心と叶



馬
御見舞

西本信長





戸限の
源士
腰力

日本信長言後巻十

人と交るるのを好むと日向山門を降儀せるといふ人々も皆佛の
親愛を重んずる人々の名号と基く念佛の外他すありとも見え
へりたり此源太彼巨材の引出がごときを彼本意の山は素り
門後の人々も向ひしやうの巨材を引出はる水の力と備せん
かつかまそり及びぶくく此山中樹木は埋ま谷ありのまが同
まきくはとんとつづく地脈と地理と考る小本曾河の水
源の此れよりよみは「徳とよまが」見ゆへに門後の男女
心もろくく思入ともも後より負する竹のしが源太のまよまがひ
生勢ありたる樹木を押しつけ谷あやみと撥くく小本その不
より僅かに丁どくく転ぶつづく深く水多の谷ありのまよ
此れより谷ありのまよとく遙りに帯も見れば源水激つとく

て其海を中事多くく人々これを見てまき小勢も此源太
こそ唯人ははらじお小佛の化あり人々くと勢もかきり
く其意は源太よまよは源太うまづひく其流まよま本曾
川の水源なりまよ其意まよ此材木を推やまやうく道園
近き乃門後を拓き集め老若をまよび髪と切りて素と判
そまよを以て彼太本とまよひ教百人をして引ひまよとさらよ
勤くまよれりまよにあひ其耐源太門後の人々も向ひまき小勢
をまよげまよはまよ皆小祖聖人の此の恩を蒙りたるがく此源太一ツ
勤し得るつ門祖師の大恩を報ひたるまよまよまよのまよ
いで我一人の力と見えまよまよ両神がまよまよまよ三王のまよ
まよ勇相をまよまよ教百人の力まよ勤くまよた太本のまよまよ

あ一信の力と露らるゝ一巻うらうと見しガ恐しやこりる本
ゆりくと物ひく三尺半推しより是とみく多くの門校
肝と渡しある抄びじの天かやれぞ人回業まはるゝに
西方阿弥陀如来の化現そ本寺の建立を授け給ふ物なり
つるきとくと見ろくうの命うぎり根のざり引出さるひ抄くまじ
とく衆人一日は教をあげあいやくと引わらふらんかく谷あひ
上まぐ引物ぬ此所強士大さ小勢び今心安」とく抄し四
うろ岩の下へみをま門ゆ彼大本の両もみけあいとつて谷の
内(投函)ぬ其懐力実の佛の方便よあざん天物の仗業又
やとる者おみきて恐まろ強士が言に遠りた保して此保本
本曾川(流)て橋又都又巡りしより本六條本教寺いよやう小

造匠(造匠)教如上人門法としく後し終ひ先の本寺と西本教寺
と称し後乃本寺を本本教寺と唱へ東西羽翼の如く門後
の渴仰盛ふ繁茂日秋念佛の夢和唱して去此不遠の後
樂浄土よりとそと踏懸と多う三心に修の事慈悲教思願
又銘と法性常樂乃如喜百歩の外は震動(まじ)きに奉教(まじ)実
乃(實)徳(徳)業(業)万代(万代)不易(不易)の招提(招提)なり統(統)る小戸(小戸)源山(源山)の源(源)まは
石思(石思)懐(懐)力を(力)を(を)出(出) 梁(梁)本(本)と引物(引物)しつるの(の)見(見)る(る)ぬ(ぬ)持(持)之
とく教(教)如(如)上(上)人(人)感(感)思(思)石(石)人(人)と信(信)州(州)ま(ま)りて其(其)人(人)とま(ま)の(の)り(り)で
終(終)ひ(ひ)多(多)る(る)小(小)後(後)し(し)菴(菴)の(の)其(其)後(後)ま(ま)の(の)う(う)ろ(ろ)強(強)士(士)の(の)妙(妙)方(方)とま(ま)る(る)の(の)る
し(し)勢(勢)の(の)同(同)人(人)ま(ま)り(り)る(る)ま(ま)は(は)る(る)ま(ま)り(り)る(る)都(都)又(又)降(降)り(り)上(上)人(人)又
亦(亦)し(し)と(と)り(り)と(と)る(る)上(上)人(人)し(し)本(本)寺(寺)ま(ま)り(り)る(る)ま(ま)り(り)又(又)思(思)石(石)ま(ま)其(其)人(人)相(相)と(と)勢(勢)の



日本信長言林卷六

後ハ身の程は十餘りて眼中をさるどく多白く言信明り小
言は齒牙に其相親珍本重幸より細く重幸小治の
の合戦入ありとれと客に其生記を明り此世源士也や重
幸ははらうさうと上人いへ隠しく抄記して満園の門後
何分らざる勢のりくせ後人とも終り其至不瓜初る者
居恩儀ありしりしりともなり

繪本拾遺信長記後編卷之十 大尾

一冊本信長言集卷一

のほろ亭 和月 改綴 九十八前後



能く
善く



國本信長言集卷一

